

コンスタンティノポリスの建設とその意義

新 田 一 郎

【要約】 コンスタンティヌスに依る新首都建設は、同じく彼に依るクリスト教の公認と並んで爾後のローマ帝国、そしてヨーロッパ世界を変貌せしめた最も重要な事件として特筆されねばならない。

しかしいかなる理由で新首都建設が意図されたかという問題に対しては、なお定説なく、一方ではこれを専ら(1)軍事的・地理的・政治的事情の下で考察する立場と、他方(2)新首都建設をローマ市との緊張関係においてとらえ、宗教的考察の必要を主張する見解をめぐり顕著な対立が見られている。

四世紀の帝国の国際状況に目を向ける時、我々は第一の立場を承認せねばならない。しかし、当時ニコメデア、テサロニカ、シルミウムの諸都市が同じく政治・軍事・地理的意義の故に帝都になりながら、なおコンスタンティノポリスの様に「永遠の都」「第一のローマ」となり得なかつたことを考える時、更に宗教的考察の必要性に迫られるのである。

以下私は第二の立場に立ちつつ、就中これをローマ史内の問題として考察し、新首都が異教都市ローマへの対抗都市つまりクリスト教的世界都市として建設されたことに及びたい。

序

三三〇年五月一日、コンスタンティヌスは治世二五年を記念し、自らの名を冠したコンスタンティノポリスの落成を祝った。ユリアヌスのいう *novator* ^① コンスタンティ

ヌスの面影を最もビビットに描出するこの事件は、彼によるクリスト教の公認と並んで爾後の帝国、そしてヨーロッパ世界を変貌せしめた最も重要な事件として特筆されねばならぬ。史家が通常ビザンツ史の端緒をコンスタンティノポリスの建設に求めているのも故なしとはしないのである。

しからは如何なる理由でコンスタンティヌスは千有余年の歴史を持つローマ市とその伝統から決別し得たのであるか。何故に彼は帝都としての現実的意義は失ないつつも、なお永遠の都、世界の女王たるローマを放棄し得たのであるか。この問題に言及した唯一の人であるゾシムスは、新首都の建設を、コンスタンティヌスがその治世二〇年祭の折、ローマ市の伝統的慣習を破り、神々の宗教を軽蔑したため、ローマ市民の反感をかつたことに言及しつつ「この神事を挙行することを軽蔑したため、彼は元老院と人民の怨を招来した。彼は凡ゆる方面から神を潰す者と呼ばれたため耐え得なくなり、ローマに比肩し、自己の宮廷を移し得る町を探そうと決心した」と記述しているが、この彼の見解を認めるか否かにより、新首都建設事情はほぼ対立する二つの立場に分けることが出来る。

その一つは新首都建設の中にローマ市との対抗関係を認めない立場であるが、この立場に立つ者としては(1)新首都建設事情を専ら蛮夷勢力への対抗関係においてとらえる Gibbon, Burckhardt, Gern の見解、(2)新首都は帝国の拡大・発展の結果、その地理的中心地としての位置を失っ

たローマ市の欠陥を補う目的で建設されたとする Buty, Milligen の見解、及び(3)当時、東方ギリシア世界が政治・経済的にも、文化的にもラテン西方を圧していた事実と関連させつつ、新首都の建設を帝国の歴史的發展の論理的帰結と見、同時に新首都のもつ軍事的・地理的事情に言及し総合的にとらえた Brehier, Pignaniol の見解を指摘することが出来る。

これに対しゾシムスの立場を肯定しつつ、新首都建設事情をローマ市との緊張関係においてとらえ、宗教的考察の必要性を主張する見解がある。この分野では先ず宗教上の動機が政治上の動機を強化したことを指摘した Reumont の見解があるが、この立場をより具体化したのは Kraft, Jones, Baynes である。彼らのうち、コンスタンティノポリスのクリスト教的性格を特筆しながらも、そのローマ市への従属的態度に鑑み、対ローマ的立場を強調することを避けた Kraft の見解はむしろ慎重であるが、「異教の礼拝でさして汚されていないこの新首都は、異教的過去との決裂と、新しいクリスト教帝国の始まりを象徴する企てであった」とした Jones の見解、及び「ティベル河畔の首都

が古い信仰の牙城であったのに対し、コンスタンティノポリスがクリスト教都市となった」ことを指摘した Baynes^③の見解には明確に対ローマ市的立場の強調が見られる。そしてかかる主張はコンスタンティノポリスのクリスト教的性格を異教都市ローマとの著しい対比の中に浮彫りにした Vogt, Alfoldi^④らに於いて更に具体化されることとなるのである。

かくして今日、新首都建設事情は一方ではローマへの対抗意識を認めず、それを専ら政治・軍事・地理的背景からとらえた Bréhier, Piganiol, Bury^⑤の立場と Alfoldi, Vogt, Jones^⑥に代表されるローマへの対抗関係を認め、宗教的考察の必要をも主張する見解をめぐり顕著な対立が見られるのである。しからは、これは如何に見るべきであるか。

③ Ammianus m. 21: 10, 8…… novator(is) turibator(is)que piscarium legum et moris antiquitus recepti.

④ Zosimus II. 29.5-30.1.

τῆς ἐπιτοῦ ἀρεσίας ἀποορατῆρας, εἰς μίτος τῆν ἑπονοῖαν καὶ τὸν θῆλον ἀνέρχων, ὅτε ἐστρατὶ δὲ τὰς πρὸς τὰς πόλιν ἀρεσίας ἐστὶν βλαφῆρας πῶλον ἀρτίποτον τῆς 'Ρώμης ἐστῆκε, καὶ' ἦν αὐτὸν ἐστὶ βλαφῆρα κερταρῆσανδα.

⑤ E. Gibbon, The Decline and Fall of the Roman Empire.

chap. 17 村山勇三訳

「有利な位置として彼は欧亜の境界を選んだ。それはドナウとタイナス河との間に棲息する蛮族を強大な軍力をもって抑制し、不名誉な条約のくびきの下で悶々としているペルシア國王の行動を執拗な眼で監視せんがためであつた」

④ J. Burckhardt. Die Zeit Konstantins des Großen, 1949, SS. 361-2

彼は「コンスタンティノポリスの建設は先ずイリリクムの主張であり、その地の無上の榮譽であつた」とし、三世紀の帝國の危機の時期に演じた颯州イリリクムの役割に関連させて建設事情を説明している。

⑤ E. Gern, Zu den Legenden von der Gründung Konstanztinopels, 1950, SS. 155~157

彼の見解は、コンスタンティノポリスの建設を、バルカン半島が三世紀末、帝國の救済のために演じた意義との関連においてとらえるものであり、極めてブルクハルト的である。

⑥ J. Bury, A History of the Later Roman Empire London 1889) Vol. I, p. 51

彼に依れば、新首都は全帝國の首都ではなく、ローマが西方で有しているものを東方で満足すべき地でなければならなかつたとし、アレクサンドリア、アンティオキア、セルデイカ、ナイスス、テサロニカ等の諸重要都市が候補地に挙げられつつも新首都となり得なかつた事実を、専らその地理的位置から説明している。従つて「古ローマの位置がもつと中心に近ければ新ローマは決して建設されなかつたであらう」という結論が彼

から導びかれることは当然であらう。

- ⑦ A. Millingen, *Byzantine Constantinople* (London 1899) pp. 4-5

Bury 以上はコンスタンティノポリスの地理的背景を論じて、彼は新首都の歴史はその地理的位置を想起する点になじみは理解し得ぬことに触れてゐる。

- ⑧ L. Bréhier, *Constantin et la fondation de Constantinople* (*Revue historique* 119, 1915) pp. 241-272

右論文の中心点はこれを(2)コンスタンティノポリス建設を異教的ローマへの対抗関係において把握したソシムスと彼に依拠した Duryy の見解、及び(b)同じくソシムスに従ふコンスタンティノポリスの建設事情をソリスト教対異教の対立の中で描いた Duchesne の見解に対する彼の批判点を求められよう。

ブレイエの前者に対する批判の根拠を列挙すれば①コンスタンティヌスがローマを首都にしたことがなかつた時、彼がローマを放棄したという叙述は不合理なこと②一〇年祭の折の元老院の皇帝に対する好意的態度、新首都建設が進行していた二〇年祭の折もローマは何ら不快な念を抱いてなかつたこと③コンスタンティヌスの死の際、温泉・劇場・市場が全て戸を閉し、町全体が喪に服し、皇帝の遺体をローマ市に埋葬することを要求したことの三点である。

これに対し Duchesne に対する批判の論点は以下の如くである。①コンスタンティノポリスがアンティオキア、アレクサンドリア、テサロニカに比して著るしくクリスト教的色彩が稀薄であつたこと②コンスタンティノポリスでは異教の礼拝は禁

せられながら、なお異教寺院の存在は黙認されている事実、③同市の教会建設も帝国のクリスト教化に歩調を合せらるゝのであり、コンスタンティノポリス独自の現象ではなかつたこと。

④ H. Dörries の見解を、根本的に Bréhier と同様である Konstantin der Große (*Urban Bücher* 1935) S. 56

- ⑤ A. Piganiol, *L'Empire Chrétien* (*Histoire générale par G. Glotz*, Tome IV, 1947) p. 49

彼は Duryy, Bury 同様コンスタンティノポリスの並ぶまなき地理的位置、及び三世紀の帝国の危機の際に演じたその橋頭堡的役割に留意しつつ、就中建設事情を戦略的理由に求めてゐる。

- ⑥ A. Reumont, *Geschichte der Stadt Rom* (Berlin 1876) Bd. I, S. 609

- ⑦ H. Kraft, *Kaiser Konstantins religiöse Entwicklung* (Möhr Tübingen 1955) S. 116

- ⑧ A. Jones, *Constantine and the Conversion of Europe* (London 1948) S. 236

もともとコンスタンティノポリスの持つ戦略的意義への考察も十分になされてゐる。

- ⑨ N. Baynes, *The Byzantine Empire* (London 1952) p. 16

- ⑩ J. Vogt, *Constantin der Große und sein Jahrhundert* (München 1949) S. 219-20

彼の見解は一方ではドナウ・ヘルシア方面の蛮夷への対抗上、要塞都市ビザンティウムを撰んだ経緯を明白にすると共に、他方ソシムスに従ひ、ローマ市への対抗の形で新首都建設を説明

し、遷都の中にコンスタンティヌスの異教からの最後の転向を認むべき⁹⁰。

② A. Alföldi, *The Conversion of Constantine and Pagan Rome* (London 1948) pp. 100~103; *On the Foundation of Constantinople* (J.R.S. 37, 1947) pp. 11~12

いずれも、旧ローマと新ローマとの対立を認め、それを元老院・異教・ローマ市対皇帝・クリスト教・コンスタンティノポリスという系列で眺め、豊富な貨幣資料に依拠しつつ新首都がクリスト教的世界帝国の中心となったことを論じている⁹¹。

一

コンスタンティノポリス建設事情を軍事的・地理的・政治的に把握し、この新首都建設の中に秀れた政治家としてのコンスタンティヌス像を樹立したブレイエ、ピガニオルに代表される見解は帝国の四世紀の状況を想起する時誤りではない。何故そう言えるのであるか。

三二四年秋、コンスタンティヌスはクリスト教迫害者、タイラント、リキニウス^①を倒し帝国統一の事業を完成した。しかしリキニウスの失墜は内戦の終了を意味しても、なお外戦の終了を意味するものではなかった。当時ライン方面

ではフランク族とアラマニ族がガリア侵入を意図し、ドナウ河谷、黒海方面ではゴート、サルマティア族がバルカン・小アジアを窺っていた。しかしこの期間蛮族の動きが最も激しかったのはドナウ中・下流地方であった^②。コンスタンティヌスがなお西方のアウグストであった三二四年前、彼がガリアを後にし、パンノニア、モエシアに長期間滞在したのも蛮族に対抗するために他ならなかった。彼は更にこの地方への蛮族の脅威が一層増大した三二八年以後は、何回となくドナウ河を越えてゴート族を打つと共に辺境地防禦に専念した^③。三三二年頃建設された *Dobroudia Axiopolis* から *Tomii* を結ぶ新城壁はその一例である^④。

しかも帝国の危機は単にドナウ下流の地域にのみ限られただけではなかった。三世紀中葉、ローマ帝国の衰退期に著るしくその勢力を拡大していた、ペルシア帝国の脅威は当時更に増大していた。三三三年のカエサル・コンスタンティヌスのアンティオキア派遣 *Amida, Antioinopolis* 等の辺境諸都市の要塞化^⑤はこの間の事情を如実に物語るものである。伝えるところによればコンスタンティヌスはその臨終の時まで戦備に怠らなかつたといわれている^⑥。

我々がかかるドナウ下流域・黒海・小アジアと三方から押迫る蛮夷勢力に目を向け、次いでコンスタンティノポリスの占める位置に言及する時、新首都が帝国の権力の中心点として特に好都合であったことは容易に認め得るであろう。加うるにコンスタンティノポリスは天然の良港であり、要塞地の条件を満し、更に人的資源に恵まれた属州イリリウムを控えていた。ここにおいて我々は最早建設事情を軍事的・地理的・政治的に把握したブレイエ、ピガニオルらの見解には何らの異論をもさし挟み得ないのである。

しかし三世紀来、同じくドナウ河流域のシルミウム、その背後のテサロニカ、小アジアのニコメディアが各々皇帝マキシミアヌス、ガレリウス、ディオクレティアヌスの居住地となつたにも拘らず、そのいずれも「新ローマ」^①、「第一のローマ」^②、そしてローマ市同様「永遠の町」となり得なかつたのに反し、ひとりコンスタンティヌスの町コンスタンティノポリスのみがこれらの榮譽を勝ち得た一事を想起する時、なお新な立場からの考察の必要に迫られるのである。^③

当然ここで注目されねばならぬのはコンスタンティノポリ

リス建設事情に直接言及した前述のゾシムスの見解である。^④ローマ市への対抗都市としてコンスタンティヌスが新首都を建設したとする彼の見解はブレイエに依り余りにも子供じみた主張として却下された。^⑤しかし少なくともブレイエらの見解をもつてしては首都建設事情を完全に説明しえぬ時、ゾシムスの立場は再び脚光を浴びねばならぬと考える。

従つてゾシムスに依拠し宗教的考察に重点をおきつつ新首都建設事情を説明した Jones, Baynes, Vogt, Alföldi らの立場が主張されねばならぬ。しかし彼らの見解はクリスト教都市としてのコンスタンティノポリスの性格を描出し、コンスタンティヌスの意図がどこにあつたかを説明しながら、なおそれを皇帝の宗教的發展、及び帝國思想との内的関連の中で有機的にとらえる努力は見えていないし、ゾシムスのいう新首都の対ローマ市の性格の描写も極めて弱い。しかも Jones, Baynes の主張は建設事情をビザンツ史の中においてとらえる傾向が強く、これをローマ史の中から理解しようとする努力は余り見当らない。^⑥我々はコンスタンティノポリスの建設をもつてビザンツ史の発端となす慣習に迷わされてはならない。コンスタンティノポリスの建

設は就中ローマ史の中の事件であり、従ってローマ史の中から理解されねばならぬ。

以下私は先ず新首都建設に先立つコンスタンティヌスの諸政策、及びローマ世界の精神的系譜をたどることにより、新首都建設事情の前景を素描してみたい。

- ① Eusebius, *Vita Constantini* II. 46
- ② A. Pignaniol, *L'Empire chrétien* p. 13, 45, 53
- ③ A. Pignaniol, *ibid.*, p. 45
- ④ E. Stein, *Geschichte des spätromischen Reiches* (Wien 1928) S. 197-8
- ⑤ A. Pignaniol, *ibid.*, p. 54
- ⑥ A. Pignaniol, *ibid.*, p. 57
- ⑦ A. Pignaniol,
コンスタンティヌスが対ヘルシア戦にその主力を注ぎ、ユリアヌスは対ヘルシア戦で生命を落とし、一方ヨウイアヌスが屈辱的和平を締結せねばならなかったことは同じくヘルシアの脅威を示すものである。(E. Stein, *op. cit.*, S. 262-4)
- ⑧ Sozomenos, *Historia Ecclesiastica* II. 3. *véa*・*Pólym*
- ⑨ Socrates, *Historia Ecclesiastica* I. 16.
彼(コンスタンティヌス)はコンスタンティノポリスと新しい名で呼び、法規をもつてそれを *θεοκρατία* (*Theokratia*) と指名するのとを定めた。
- ⑩ Codex Theodosianus XIII 5. 7

……utris quam aeterno nomine iubente deo donavimus.
⑩ O. Seock はこれを皇帝の個人的虚栄心の誇示に求めているがなお不十分である。(Geschichte des Untergangs der antiken Welt. Bd. III. S. 426)

⑪ Zosimus, II. 29. 5-30. 1

⑫ L. Bréhier, *op. cit.*, p. 241.

⑬ *Die* Alföldi は例外である。しかし彼の研究はその著 On the Foundation of Constantinople (J. R. S. 37) に示される様に主にマクシマティヤの立場の研究であり、フレイユ的見解を否定するにはなお不十分である。

II

勝利と結びつく伝統的ローマ理念が現実的意義を失った三世紀において、その間隙を補い、理想と現実との間の著しい背反を調整したのは、かつて歴代皇帝に勝利を与えたローマの古き神々への信仰であった^①。当時皇帝にとって宗教上の義務の遵守が正に國家繁栄のための必須の手段と考えられていたのはかかる事情に由来するものである。従って皇帝に宗教的中立の態度が許されなかったことはいうまでもない^②。ウツレリアヌスのイシスへの熱狂、アウレリアヌスのソル・インウィクトス、ガレリウスのマルスへの

婦依はその好例であるが、コンスタンティヌスのクリスト教への婦依をかかる三世紀の諸皇帝の態度と同系列において眺めることは決して無理ではない。しかしなおコンスタンティヌスにとつてクリスト教のもつ意義はアウレリアヌスのソル、ウァレリアヌスのインスに對する意義とは異なつていた。「混乱と悲惨の中に喘ぐ帝国の救済者に最もふさわしい者として神から選ばれ、神の援助によりその課題を完成した」という強い自覚に立つコンスタンティヌスにあつては、クリスト教は正に帝国の回復と繁榮には必須のものであり、彼の全ての関心事であつた。このことは彼の書簡に照して誤りではない。

早くも三一三年頃、彼は国家が至高・至聖の全能の神に對する信仰を輕蔑すれば、国家は大きな危険に遭遇するが、正式にそれを遵守する時は著しい繁榮をもたらし、人間關係の特別な幸福を可能にすることを指摘して神の礼拝の必要を説き、その当事者たる聖職者の意義を強調した。彼が聖職者を一般俗事から解放したのもかかる確信に立つものであつた。彼にとつて救済の希望は神に由るものであつた。神こそ凡ゆる祝福の源泉であつた。リキニウス戦に先立つ

てなされた「全能なる神よ、私は汝に願う。あなたの東方の人々に対し寛大で恵み深くあつて下さい。長い間憂愁により打のめされている凡ゆるあなたの屬州の人々に、あなたの僕たる私を介して療しを与えさせて下さい……」という彼の祈願の中に、我々は彼が神をその僕に勝利を与える者、その敵を破壊に追いやる者として表現している事情をビビットに認め得るのである。彼は神への背反が人類を圧し、さながらベストによる脅威にさらされた如き国家を救わんがために立ち、神の援助を介しつつブリタニアの海沿いの国をふり出しに凡ゆる悪事を追い、東方の地にやつて来た。そしてこの地において彼は自らの努力に依りタイラントの下で苦しんでいたクリスト教徒が解放されたことに言及し、何人も最早恐れる必要のないことを述べ、鉾山労働者は十分な休息を楽しみ、更にクリスト教徒の故に軍職の地位を剝奪された者は本人の希望に従い、軍役への復帰、名譽ある除隊のいずれの撰択も自由であること、そして積極的な教会建築の援助等に触れ、新しき祝福の時代の到来をうたつてゐる。

かくして彼にとつては、国家の繁榮から推して、それを

与えた神の能力は自明の理であった。当然、彼にとつて最も重要な目的はかかる恩恵を許容した「全能なる神に対して唯一の信仰・純粹な愛・宥和的な敬虔を維持していくこと」^⑧に他ならなかつた。ドナチスト論争解決のためアフリカへ赴くことすら辞さなかつた態度、アリウスとその説の信奉者を邪惡な説教者、惡魔の映像と述べ、アリウスの手になる書物の焼却を命じている事実、ノウアティアヌス、マルキオンの異端者を論ずるのに「汝らにより健康な者は病氣となり、生ける者は永遠の死に連れ去られてしまふ」^⑨としてゐるのはこの間の事情を如実に物語るものである。

しかも神の恩恵に対し「感謝の気持を決して忘れることは出来ない」^⑩と述べ、更にこの神を崇拜し永遠に彼に感謝する、とするコンスタンティヌスにとつてはこの神の栄光は普遍化され、恒常の規定とならねばならなかつた。いわゆる立法化である。先ず教会とその聖職者に対する友好的立法についていえば、三一九年一〇月の聖職者を一般公務から免除する規定^⑪に始まり、三二一年四月の司教に対する奴隸解放権の付与^⑫、同年七月の遺言による個人財産の教会への遺贈の許可^⑬、及び司教・聖職者の司法的独立を規定し

た三三〇年二月の立法^⑭が挙げられる。他方聖職者外の人々を対象とする立法について言えば、先ず三一五年と三二二年の二回に亘り公布された貧乏人の幼児売却を国庫援助をもつて阻止した規定^⑮が注目される。一層クリスト教的立法と考えられるものにアウグスト以来、独身者におかれていた法律上の不利な点を一掃し、未婚者を既婚者と同等の立場におくことを規定した三三〇年四月の立法^⑯がある。結婚の神聖視と、理由なき離婚の禁止規定も同様皇帝の宗教的確信に基^⑰づくものである。しかし就中、三一五年以来ほぼ一貫して主張されているかなり強硬なユダヤ教政策^⑱、三二一年の日曜休日の規定^⑲、三二五年のグラディアトール競技の禁止規定^⑳は特筆されねばならない。

以上のほぼ三一五年來、一貫して現われている皇帝の立法に目を向ける時、我々は確実に皇帝がクリスト教世界の開拓者として現われたことを認めねばならぬであろう。彼の書簡は、彼に勝利と平和を与えた神に対する彼の個人的感謝と自己の義務とを論じたものであり、立法はその個人的感謝の一般化・永続化として現わされたものと見做し得る。彼はまさに凡ゆる伝統の改革者であつた。しかも彼の改

革者たる所以は、クリスト教との関連の下で眺めて始めて理解され得るものなのである。ここに於てかかる *novator* としてのコンスタンティヌスの性格の具体化と見做し得るローマ市との決裂と、その結果としての新首都建設を、クリスト教と切り離して考えることは殆ど不可能であろう。この間の事情はコンスタンティノポリスの対抗都市と考えられるローマ市に目を向ける時一層明瞭になるのである。

- ① C. Schneider, *Geistesgeschichte des antiken Christentums* (München 1954) Bd. II, S. 318
- ② S. Greenstade, *Church and State from Constantine to Theodosius* (London 1954) p. 13.
- ③ C. Schneider, *op. cit.*, Bd. I, S. 732
- ④ イヌムが「不敗のイヌム」「万軍のイヌム」「女王イヌム」の名を持つサラピモン、ポウス・ヘリオヌス、マルヌと共に勝利神として広へ兵士間に崇拜をわづらうたことは特筆をねばならぬ。
- ⑤ Eusebius, *V. C.* II, 28. (Brief 13)
- ⑥ コンスタンティヌス自筆の書簡の分類番号は全て H. Kraft, *Kaiser Konstantins religiöse Entwicklung* (Tübingen 1955) による。
- ⑦ Eusebius, *Historia Ecclesiastica* X, 7, 1. (B. 3)
- ⑧ Eusebius, *H. E.* X, 7, 2. (B. 3,)
- ⑨ *Optatus Appendix* 9. (B. 11)
- ⑩ Eusebius, *V. C.* II, 24. (B. 13)

- ⑥ Eusebius, *V. C.* II, 55. (B. 15)
- ⑦ 彼が屢々「偉大なる神の力」*τῆ τοῦ μεγάλου θεοῦ ἔργα* (Eusebius, *V. C.* II, 24) 「全能の神の力」*ἀφ' ἐστὶ τοῦ Πάνατος ἰσχυροῦ θεοῦ* (Eusebius, *V. C.* II, 42) と呼称してゐるもの間の事情を示す。勿論、クリスト教のもつ戦闘力・組織力のみの強調にとどまらざるかかる彼のクリスト教観が正当的であるとほらえながら、四世紀の宗教思想を想起する時、なお、彼のクリスト教への全身の帰依は疑い得ないであらう。

- ⑧ Eusebius, *V. C.* II, 28. (B. 13)
 - ⑨ Eusebius, *ibid.*, II, 31. (B. 13)
 - ⑩ Eusebius, *ibid.*, II, 32. (B. 13)
 - ⑪ Eusebius, *ibid.*, II, 33. (B. 13)
 - ⑫ Eusebius, *ibid.*, II, 46. (B. 14)
 - ⑬ Eusebius, *ibid.*, III, 17. (B. 19)
 - ⑭ *Optatus Appendix* 7, 3. (B. 10)
 - ⑮ Athanasius, *Nic. Synodi* 42. (B. 25)
 - ⑯ Athanasius, *ibid.*, 39. (B. 22)
 - ⑰ 「……発見されたマリヌスの一切の書は焼却されるべきである。彼の邪悪な教理は消え去らねばならぬのみか、その記憶も拭き去らねばならぬ。秘かにマリヌスの書を所有し、それを取り出して焼却せぬ者は死刑に処せられねばならぬ……」。
 - ⑱ Eusebius, *V. C.* III, 64. (B. 28)
- 彼が異端問題にうかに勞したかは、フランクサンドロスとアリウス宛た書簡の中で彼が「明るい光、静かな生活の喜びを私に与えて欲しい。私に静かな日と静かでない夜を与えて欲しい」

5……」をコトフるはコトナカク難ク得テマツ。

⑮ Eusebius, V. C. II. 29. (B. 13)

⑯ Codex Theodosianus, XVI. 2. 1-2. (319年10月)

⑰ Cod. Theod. IV. 7. 1. (321年4月)

⑱ Cod. Theod. XVI. 2. 4. (321年7月)

⑳ Cod. Theod. XVI. 2. 7. (330年2月)

㉑ Cod. Theod. XI. 27. 1. (315年5月) 27. 2. (322年7月)

㉒ Cod. Theod. VIII. 16. 1. (320年4月)

この文法は正統キリスト教会のかかりの聖職者ヲ要求セラルた独身主義、及び三世紀後半以來發展シテシメテ了修道士階級ニ密接な關係を有シテ居ル。 (H. Lietzmann, Geschichte der alten Kirche (Berlin 1938) Bd. III S. 133, H. Dörries, Das Selbstzeugnis Kaiser Konstantinus (Göttingen 1954) S. 177)

㉓ Cod. Theod. IX. 24. 1-4 (320年4月) IX. 7. 1. (326年2月) vgl. C. Schneider, op. cit., Bd. I. S. 683

㉔ Cod. Theod. III. 16. 1. (331年)

皇帝はコトビテ妻がその夫に離婚狀を出し得るものは夫が殺人者、魔術師、墓荒しの罪狀のいずれかに該当する時のみ限定シ、他方夫の側からの離婚も妻が姦婦、魔術師、売春取持者の三条件のいずれかに該当する時にのみ限つた。

㉕ 彼のロマヤ教政策は特に圧迫的ではなから (Cod. Theod., XVI. 8. 3-4) しかし彼はロマヤ教を「死の宗派」*feralis secta* (Cod. Theod., XVI. 8. 1.) トシテ彼らがキリスト教徒、異教徒の奴隷を所有するコトを禁止シ (Cod. Theod., XVI. 9. 1) 更に

ロマヤ教からキリスト教に改宗した者に暴力行為に出た者は火刑に処せらるコト (Cod. Theod., XVI. 8. 1.) を規定シテ居ル。

⑯ Cod. Theod. II. 8. 1. (321年7月)

ローマンニシテ、皇帝が休日を含む日 *dies dominica* とキヤ異教的な太陽の日 *dies solis* とコトフる点を指摘シテ、これを中文的性質を有シテ居ルキヤニシテ (Lietzmann, op. cit., Bd. III. S. 132. cf. A. Jones, op. cit., p. 100) しかし異教世界では太陽の日が祝祭日、休日と何れの關係もなかつたコトヲ注意せねばならん。 (J. Vogt, op. cit., S. 186. A. Alföldi, Conversion, p. 48.; H. Dörries, op. cit., S. 181)

㉒ Cod. Theod. XV. 12. 1 (325年10月)

彼はコトビ「血腥を見世物は公の平和と家庭的平靜の中におつては不快を与ふる (cruenta spectacula in otio civili et domestica quiete non placent)」が故に「従来、競技場行為を宣告せられたる罪人は獄山に送らるべきコトを規定シテ居ル。

㉓ J. Vogt, op. cit., SS. 212-3

三

三世紀の間断なき戦争は皇帝の軍事的義務をこの上なく高め、皇帝の居住地はかかる軍事的義務を遂行するのに適當な地であることが強く要求されていた。ライン河畔のローニエ、その背後のトレーヴ、リヨン、ドナウ流域のシルミウム、その南のテサロニカ、セルディカ、北伊のミラノ、東

方のアンティオキア、ニコメディアはかかる状況の下で首都の地に高められたが、これはとりもなおさずローマ市が首都としての資格を既に失っていたことを示すものである。

しかしこの時期をもつてローマ市の帝国における指導的地位が終つたと見做すのは当らない。上記のトレエヴ、テサロニカ、ニコメディアに代表される皇帝の新首都は純然たる軍事目的から建設されたものであり、ローマ市への對抗意識は全くない。ローマ市から指導的地位を剝奪する試みは減多になく、あえてこれを企てた者は激しい攻撃に遭遇し、その目的を達成していない。マキシミアヌス・トラックスのローマ市攻撃の失敗、ローマ市攻撃を試み、その故に軍隊から見放されて死んだセヴェルス、初めの意図を放棄してパンノニアに退却することに依り死から免かれたガレリウスはその好例であろう。

皇帝・兵士に畏敬の念を与え、ローマ市が、皇帝の居住地たる地位を失いながらも、維持し得たかかる指導的地位はその発展史に目を向ける時自ら明らかとなる。ローマ市の発展は一都市が一帝国に拡大し、世俗権力が全宇宙の支配概念を靈化した並びもなき過程であつた。しかもロー

マ帝国が世界の征服者である時、ローマ市の名は「皇帝の都市」「世界の中心都市」と同意義に用いられていた。ローマ市はいわば「帝国の故郷」であり、一首都以上の存在であつたのである。⑥三世紀の混乱期の中にあつてもなおローマ市が指導的地位を保持し、世界の理想的中心地たり得たのはかかる千有余年の光輝ある伝統に由来するものにならなかつた。当時依然としてローマ市の行政が *praefectus praetorio* から独立して *praefectus urbi* の下におかれ、帝国の *clarissimi* たる元老院、コンスル、プラエトルらの居住地であつたこと、その市民は屬州民と異なり真のローマ人と見做され、屬州民羨望の特権、殺物法の適用を享受していたことは不思議ではない。

しかもローマ市は皇帝の都市であるだけでなく、又聖地でもあり、古い信仰の中心地となつていた。⑦ローマがかつていかなる国家にも与えられることのなかつた勝利と平和を享受した時、彼らの感謝がその崇拜するローマ市の古い神々に向けられ、帝国の繁栄・名誉・永続が神々の信仰と不可離に結合することになつたからである。カピトルのユピテル寺院の黄金の屋根が町を隈無く照している様に、ユ

ピテルの威光は全帝国を照していたのである。しかもこのユピテルの威光は帝国三世紀の危機の中にあつても色褪せることなく、帝国の守護神であり続けた。ユピテルへの帰依・崇拜が愛国的行為と同一視され、皇帝が全て Pontifex maximus として最高・最善の神ユピテルに犠牲を捧げたのはかかる事情を如実に説明するものである。ローマ市は四世紀中葉四二三の寺院を有していたといわれる。ローマ市はまさに聖都^⑧の名に背かなかつたのである。

しかしかかるローマ市の栄光も、それが属州民の犠牲の上に築かれたものであつてみれば、我々はまた容易に反ローマ市運動の存在を想定しうるのである。既に紀元前一五六年、ギリシアの哲学者カルネアデスが、ローマは不正・偽善・破壊を象徴するものであることを指摘した大胆な発言以来、多くのギリシア人、次いでローマ人自身から強いローマ市滅亡の予言が繰り返されてきた。ローマの史家サルステイウスは、ローマ市が一人の外国王の獲物になることを予言し、ホラティウスは更に「……野蛮人は勝利者としてその足を焼土に置き、町はその馬の踏みしむるところとなろう^⑨」と述べ、ローマ市の没落を一層ビビットに把握し

た。一方、キケロの伝える、ローマ市への敵意からカプア遷都を意図した人々の運動、及びアレクサンドリア、トリアを帝都にし、ローマ市放棄を意図したカエサルの運動は注目されねばならぬ。勿論、この計画は失敗に終つてゐる。永遠の町として、その支配的地位を長く維持したローマ市が、かかる攻撃に対し微動だにしなかつたのは当然であらう。

しかしカルネアデス以来の反ローマ運動の最後の担い手となつたクリスト教運動の下では事情は異なつていた。従来までの反ローマ運動の中心がローマの標榜する正義・永遠性に対する反駁であつた時、それを受継いだクリスト教の下で、この攻撃が一段と強化されたことは容易に想像し得よう。クリスト教理念に従えばローマの正義も明白に見せかけの正義であつたからである。しかし他面ローマはベテロの殉教の地であり、紀元七〇年後はエルサレム教会の遺産を受継ぎ、*caput ecclesiae* の地位を占め、帝国伝道の中心地になつていた。コンスタンティヌスがかかる伝統の上に立つて先ずローマ市のクリスト教化を画したことは容易に想像し得よう。荘大な教会をもつてローマ市を飾る

うとした計画^①、パウロ、ペテロ教会への広汎な土地の寄贈^②、若干のクリスト教形式をもつて祝われた治世一〇年祭^③、クリスト教徒アキリウス・セヴェルスのローマ市長への任命^④等の一連の運動はその努力の現われである。

しかし一千年の伝統と約四〇〇を越える寺院を持つローマ市のクリスト教化は所詮困難であった。従来の教会の中唯一つも市の城壁内に建設されていなかったし、皇帝の建設したラテラノ・バシリカすら漸く城壁に沿って建設されたに過ぎなかつた^⑤。そしてローマ市のクリスト教化を目指した皇帝の意図は三二六年の治世二〇年祭において全く実行不可能となつたのである。皇帝はこの祝典に際し、異教的儀式と伝統的なカピトルへの軍隊の行進を軽視し、ローマ市民の憎悪を浴びた。「皇帝はセナトスとプレブスの怨を招来し」この故に彼は「ローマに比肩し、自己の宮廷を移し得る町を探そうと決心した」とゾシムスはこの事件に言及しているが、この事件を契機として、コンスタンティヌスの反ローマ市運動は新たな段階に入ったと見做し得るのである。三二四年のリキニウスへの勝利を記念して建設に着手された時^⑥、ニコメディア、セルデイカ、シルミウ

ム等の町と同列に置かれたにすぎなかつたコンスタンティノポリス^⑦が、その地位を離れ、ローマ市への対抗都市にまで高められ、永遠の町になつたのもこの時であつた^⑧。

従つて、かくして生れた帝都コンスタンティノポリスはカルネアデス以来試みられつつも、なお実現し得なかつた計画の最後の完成であると共に、クリスト教を標榜した皇帝の落着くべき当然の帰結と考えられるのである^⑨。

我々が新首都建設事情を単に政治上の革命的事件であるにとどまらず、宗教的にも革命的事件とせねばならぬ所以である。

- ① A. Alföldi, On the Foundation of Constantinople (J. R. S. 1947) p. 2
- ② A. Alföldi, Conversion of Constantine and pagan Rome (Oxford 1948) p. 65 p. 93
- ③ A. Reumont, Geschichte der Stadt Rom, S. 596
- ④ H. Fuchs, Der geistige Widerstand gegen Rom in der antiken Welt (Berlin 1938) S. 1
- ⑤ H. Fuchs, *ibid.*,
- ⑥ A. Reumont, *op. cit.*, S. 624
- ⑦ S. Dill, Roman Society in the Last Century of Western Empire (Macmillan, London 1910) p. 10

- ② A. Reumont, op. cit., S. 624
- ③ notitia regionum, aus Reumont S. 630
- ④ urbs sacrisima (Cod. Theod. VI. I. 16, etc.)
- ⑤ H. Fuchus, op. cit., SS. 2-8
- ⑥ C. Schneider, op. cit., Bd. II, S. 321
- ⑦ Sallustius, Epist. ad. Caes. I. 5. 2. (Fuchus, *ibid.*, S. 9)
- ⑧ Horatius, Epode 16. (Fuchus, *ibid.*, S. 10)
- ⑨ Cicero, De lege agraria 2. 32. (Fuchus, *ibid.*, S. 11-2)
- ⑩ Suetonius, Divus Julius. 79. 3. (Fuchus, S. 12)
- ⑪ H. Fuchus, *ibid.*, S. 13
- ⑫ H. Fuchus, *ibid.*, S. 22. Anm. 84
- ⑬ E. Stauffer, Die Urkirche (Historia Mundi, Bd. 4, 1956) SS. 307-8
- ⑭ A. Alföldi, Conversion pp. 51-52
- ⑮ H. Schoenebeck, Beiträge zur Religionspolitik des Maximilianus und Constantin (Klio, XLIII, 1939, S. 88f)
- ⑯ H. Lietzmann, op. cit., Bd. III, S. 138
- ⑰ Eusebius, V. C. I. 48
- ⑱ H. Schoenebeck, op. cit., S. 73 f.
- ⑲ アキリウスはラタタンテウスと姻戚関係にあるクリスト教徒で三二五年一月から三二六年十一月迄、この職にあつた。
- ⑳ H. Schoenebeck, *ibid.*, S. 87
- ㉑ Zosimus, II. 29. 5-30. 1.
- ㉒ E. Stein, Geschichte des spätromischen Reiches (Wien 1928) S. 194

- A. Alföldi, On the Foundation of Constantinople p. 11
- ⑳ A. Alföldi, *ibid.*, pp. 11-12
- ㉑ A. Alföldi, *ibid.*, p. 15
- A. Alföldi, Conversion pp. 101-103
- J. Vogt, op. cit., S. 220
- ㉒ C. Cochrane, Christianity and Classical Culture (Oxford NY 1944) pp. 208-9.
- ㉓ L. Bréhier, op. cit., p. 249, p. 255

四

しからば三二四年の建設当初の意図を越え、異教都市ローマの対抗都市としての地位を獲得したコンスタンティノポリスは、はたしてクリスト教的世界都市にふさわしい景観を有してゐたであろうか。以下先ずエウセビウス、ソノメノス、アウグスティヌスらの教父の記述に従つてこれを見ていきたる。

先ずエウセビウスによると、コンスタンティヌスは彼の名の町を名譽あらしめ、卓絶せしめるのに多くの聖なる教会と殉教者の聖体をもつてしたことに触れ、同時に町を凡ゆる種類の偶像礼拝から清めようとし、寺院で偶像を崇めること、祭壇で犠牲の血を流すこと、そして犠牲を捧げる

ことを一切禁じたことを述べている。^① ソゾメノスの見解も同様である。彼はコンスタンティノポリスが宗教的時期に帝国の首都となったため、祭壇・ヘレネ人の寺院・犠牲のいづれによっても汚されなかつたこと、ユリアヌスの異教復興も彼一代をもつて失敗したことに触れ、更に建設者、住民の伝道に依りユダヤ人のみならず多くのギリシア人がクリスト教に改宗した経緯、そして就中、コンスタンティヌスが町を多くの荘嚴な祈りの家で飾つたこと等を指摘し、新首都のクリスト教的性格を描写している。^② ラテン教父アウグスティヌスがその神国論の中で、コンスタンティヌスが「ローマの娘として、何らの悪魔の寺院も像もない町を建設した」と記述していることも特筆されねばならない。

ところでかかる教父による記述はコンスタンティノポリスの性格に照して誤りではない様である。しかも、新首都のクリスト教化がコンスタンティヌス自身の努力によりなされていることは注目されねばならない。その具体例として、我々は先ず、皇帝がエウセビウスに宛てた書簡の中で、多くの聖職者がコンスタンティノポリスの教会に帰依しており、しかも町は急速に發展しているので、そこに十分な

教会を建設することが極めて必要であることを説き、又読むのに容易で持運びに便利な羊皮紙のバイブルの写し五〇を準備し、二つの公用の馬車で首都に直ちに送るよう命じている事実を指摘し得る。^③

かかる皇帝の努力はその教会建築において一層顕著に現われている。元来大建築がその建設者の自負と意志の表明であり、彼らの帰依する信仰を具体的に示すものであつた^④が、コンスタンティヌスの教会建築もこの例外ではない。演説中に述べられた彼の教会観はそのことを如実に示している。彼はこの中で「教会の土台が神自身の手により深く堅固に基礎づけられ、その建物の頂点は神の領域たる星の輝やく所まで届き、星に似た印で飾られた正面の壁を支える二本の雪の如く白い柱は信仰の樹立を目指し、永遠に動くことなく立つている」ことを述べている。つまり、皇帝にとつて、教会は神の秩序を象徴するものであり、彼のクリスト教への帰依を具体的に現わしたものに他ならなかつたのである。^⑤

コンスタンティノポリスはこの神の秩序の地上における顕現としての大教会を少なくとも三つ有した。神の平和を象

徴したエイレーネ教会、エウセビウスのいう殉教者（十二使徒）を記憶し、彼らの墓地の上に築かれた使徒教会、その完成は見なかったが宮廷に面して、神の知恵を頌えて建設されたソフィア教会である。勿論、教会建築はコンスタンティノポリスに限られたわけではない。神への絶体的帰依と迷信の打破を望む皇帝にとって教会建築に勝る宣伝手段がなかった時、この間の事情は容易に理解し得よう。エルサレムの聖墓教会、復活教会、オリブ山上のバシリカ、ベツレヘムの生誕教会、マムレのバシリカ、ニコメディア、アンティオキア^⑩、及びヘレノポリスの教会等はかかる背景の下で建設されたものであった。しかしなおコンスタンティノポリスの教会は特殊な意味を有していた。

まず平和を意味するエイレーネ教会はニコメディア、アンティオキアの教会に先立ち、東方の平定後第一に建設されたものであった。しかもエイレーネ教会は、リキニウスの失墜による帝国の平和回復を祝うのみならず、又アリウス異端の除却の後達成された教会上の平和をも祝う重要な建築と見做し得るのである。かつてアウグストが帝国の平和の回復を人々に知らしめるのに *ara pacis* の神殿をもつてした様に、コンスタンティヌスは、それをエイレーネ教会をもつて具体化したのである。使徒教会の持つ意義も同様特筆されねばならぬ。何故なら大理石と黄金をもつて建設されたこの荘麗な教会は^⑪、就中「救世主の使徒の記憶を永遠化する目的で皇帝が捧げた」^⑫ものであったからである。使徒教会が皇帝の廟であったことも注意せねばならぬ。

新首都の教会は従つて当然他の諸都市の教会とは区別されねばならないのであり、教会建築が単に全帝國的現象であったという理由のみで「新首都のクリスト教化を特に皇帝が望んだとは考えられぬ」^⑬とすることは出来ない。

新首都の他の景観もこのことを確実にしている。コンスタンティヌスは教会の他に多くのクリスト教的記念物で新首都を飾つた。宮殿の入口を飾るモザイクは十字架をいたゞく皇帝自身と、その息子が龍を踏まえて立つ姿を描かせ、寶石を鏤めた大きな十字架が宮殿の広間に飾られた。フォルムの装飾も凱旋門に代表される勝利の記念物の代りに、良き羊飼いの、ダニエル像に代表される聖書に因んだ像をもつてし、又市の内外に礼拝堂を建設している。事例はこれにとどまらない。皇帝は古代の迷信の徒が長い間誇りとし

て尊敬していた貴重な神像をコンスタンティノポリスの公けの場所に陳列し、専ら人々の嘲笑と慰みの対象とした。

スミントス、ピティアのアポロ像は、ために人々の軽蔑を呼び、一方デルフォイの三脚台（祭壇）は競技場に、ヘリコンのミューズの神は宮殿に置かれ、専ら裝飾の役割をばたすにとどまった。かかる偶像の陳列により、皇帝がその瀆神を意図し、それにより偶像崇拜者の誤謬を指摘したことはいうまでもない。この皇帝の政策は十分な効果を持つたものと考えられる。何故なら多くの者が偶像礼拝の誤謬を認め、異教を断念しているからである。

無論、コンスタンティノポリスが一切の異教的景観から免かれたわけではない。ゾシムスの言う様に新首都の異教寺院は閉鎖されぬままで存続を認められていたし、更に三二三年から三〇年の期間にレアとテューケーを頌える二寺院の再建が皇帝により命ぜられていた。しかし、これらの寺院は礼拝の場ではなく、彫像・美術品の陳列場であつたことに留意せねばならない。いわばそれはグレコ・ローマの芸術上の成果と伝統の導入であり、宗教問題とは切り離さねばならない。コンスタンティヌスが、宗教的には明白に

コンスタンティノポリスから凡ゆる偶像崇拜を除却することが正しいと見做し、犠牲と偶像礼拝の禁令を介して町を清めているのはいうまでもない。事実、唯の一度も祭壇は汚れた血で汚されなかつたし、血による犠牲は行なわれなかつた様である。

かくして、新首都が他の諸都市に勝つて著るしくクリスト教的性格を有していたことは容易に認められよう。約一世代後の教父クリソストモスが、当時の新首都の全人口一二万中約一〇万人がクリスト教徒であつたことを記述し、同じくソクラテスがニカイア宗会議で異端とされたアリュスがコンスタンティノポリスに到着した折、町全体が二つの党に分れ、混乱の中に投げこまれたことを伝えているのはこの間の事情を端的に示すものである。

以上の経緯を考える時、我々は立法中に見える「神の命に依り建設された町」とする記述と、それに関連する夢物語は決して虚構ではなく、皇帝自身の確信を述べるものであることに気付くのである。我々はコンスタンティヌスがアンティオキア、アレクサンドリア、テサロニカに比して著るしくクリスト教的色彩の稀薄なビザンティウムを帝都に

選んだこと、或いは新首都における異教寺院の温存をもつて、彼の中に「体系的なクリスト教都市建設の意図なし」とする見解に迷わされてはならない。我々はむしろ、四世紀初頭まで宗教的に中立ないし異教的であり、特筆すべきクリスト教的伝統を持たなかつたコンスタンティノポリスが、コンスタンティヌスの時代に一躍してクリスト教都市に高められ、やがて東方を代表する中心的地位を占めていくことに目を向けねばならない。

かくしてコンスタンティノポリスがローマ市に対抗し、クリスト教都市として建設されたことはその景観からも疑い得ないであろう。しかし、コンスタンティノポリスをローマ市に比肩する町にしようと欲して皇帝が新首都に採用した諸制度に目を向ける時、一見この対ローマ市の色彩が著るしく欠けていることに気付くのである。何故なら教父ソズメノスは、新首都が事実上ローマと対等となつたことを指摘しながら、それを新首都が(イ)元老院を有し、(ロ)その市民が穀物法の適用を受け、(ハ)町が荘大な建築物をもつて飾られ、更に、(ニ)人口の点でも富の点でも偉大になつたからであるとし、その対等性をいわばローマ市への模倣行為

に求めているからである。ソズメノスには見えていないが新首都が屬州諸都市と異なり、*praefectus praetorio* の管轄外におかれ、独自の市長官を有したこと、町がフォルム、ヒポド롬その他の公共建築物をもつて荘麗に飾られたこともこの間の事情を補足するものであるが、特に新首都がローマ市同様七丘一四区の町として建設されたことの中に、我々はローマへの熱属的態度をすら指摘し得るのである。

つまりこれはコンスタンティノポリスが、ローマ市の模倣に終始し、頭から足の先までローマ市になつたことを示すものに他ならず、かかる背景を持つ新首都に我々が反ローマ的色彩を求め難いことは一応認めねばならないであろう。

しかし、史実はなお新首都がローマ市の対抗都市であつたことを確認している。この間の事情はコンスタンティヌスによる元老院設置事情を想起する時、明らかとなる。何故に彼は異教都市ローマの指導者であり、彼の当面の敵対者である元老院を同じく新首都に設置し、その上少数ではあるがローマ市から元老院議員を招聘し、彼らのために豪華な邸宅を用意したのであるか。コンスタンティヌスが、その新首都をローマ市と対等の地位に置こうとし、その故

に或いはその市民を *populus Romanus* と呼んで穀物給与の対象とし、又市の行政を *praefectus praetorio* の管轄外におき、名誉あらしめたことは、さして異とするに足りないであろう。しかしいかにローマ市と対等の地位を目指したにせよ、皇帝の最も強固な敵対者元老院の設置と、ローマ元老院議員の招聘に現われたローマ市への模倣はなお理解困難であろう。

この問題に言及し、これは皇帝が「町の大きさに比べ住民がその地に不十分であることに気づいた」^⑥からであるとされたソゾメノスの見解も意を尽くしていない。この問題の解明には、ローマ市が当時依然として「宇宙の首、ローマ帝国の王者の町」であり、一首都以上の存在であったことが想起されねばならない。いかなる都市と雖も世界の支配都市の地位を望めば、それはローマ市を離れてはあり得なかつた時、コンスタンティノポリスもその例外ではなかつた。新首都がニコメディア、セルディカ、シルミウムの地位に留まらず、ローマ市に対抗する帝国の支配都市となるためには先ずローマ市とならざるを得ず、又ローマ市であろうと欲すれば、その理念の担い手たる元老院を抜きにしては

考えられなかつたのである。^⑦つまり皇帝が自己の当面の敵元老院を新首都に設置したのは、新首都を真に支配都市とするために一応採らねばならなかつた手段であり、それが単なる模倣・隸属的態度を越えるものであつたことはいうまでもない。新首都に見られる他の一連のローマ市への模倣もかかる背景においてのみ理解し得るであろう。

かくして、元老院の創設によつて今や新ローマとなつたコンスタンティノポリスが、宇宙の實際的な主権者になつたことはいうまでもない。三三〇年五月一日の新首都落成を記念して鑄造された貨幣が、先端に世界球と十字架を有するクリスト教的王笏を持ったコンスタンティノポリスの胸像を描いていることは、新首都の性格をビビットに物語るものであろう。

- ① Eusebius, V. C. III. 48
- ② Sozomenos, H. E. II. 3
- ③ Augustinus, De Civitate Dei V. 25
- ④ Eusebius, V. C. IV. 36. (B. 38)
- ⑤ H. Kraft, op. cit., S. 114
- ⑥ J. Burchhardt, op. cit., S. 363
- ⑦ Oratio ad sanctum coelum 1-3
H. Kraft, op. cit., S. 85

- ㉔ ノンマテ教令の建築企画は紀世三〇年祭の直後であつた (Kraft, *ibid.*, S. 150)° このマテの完成は同十の年であつた様であらう (ibid., S. 116. Vogt, *op. cit.*, S. 258)°
- ㉕ Eusebius, V. C. III. 41, 43
- ㉖ Eusebius, *ibid.*, III. 51
- ㉗ Eusebius, *ibid.*, III. 50
- ㉘ Eusebius, *ibid.*, III. 58
- ㉙ Eusebius, *ibid.*, III. 50
- ㉚ O. Seeck, *Geschichte des Untergangs der antiken Welt* Bd. III. S. 429
- ㉛ H. Lietzmann, *op. cit.*, Bd. III. S. 136
- ㉜ A. Alföldi, *Conversion*. p. 114
- ㉝ Eusebius, V. C. IV. 58
- ㉞ Eusebius, *ibid.*, IV. 60
- ㉟ H. Kraft, *op. cit.*, S. 156
- ㊱ L. Bréhier, *op. cit.*, p. 266
- ㊲ Eusebius, V. C. III. 3
- ㊳ 羅馬のキリスト教の歴史 (V. C. II. 46. (B. 14))° このマテの完成は同十の年であつた様であらう (ibid., S. 116. Vogt, *op. cit.*, S. 258)°
- ㊴ Eusebius, V. C. III. 49
- ㊵ Eusebius, *ibid.*,
- ㊶ Eusebius, V. C. III. 48
- ㊷ Eusebius, *ibid.*, III. 54 Sozomes. II. 5
- ㊸ Socrates, I. 16

- ㊹ ノンマテキリストは凡ゆる価値を彫像の持つ美にならざるをなげきながら彫像の芸術作品としてのマテの彫像はあつたといふ説がなされる (H. Dörries, *Das Selbstzeugnis Kaiser Konstantinus S. 335*)
- ㊺ Eusebius, V. C. III. 54
- ㊻ Zosimus, II. 31
- ㊼ J. Toynbee, *Roma and Constantinopolis in Late-Antique Art from 313 to 365* (J. R. S. 37. 1947) p. 136
- ㊽ H. Kraft, *op. cit.*, S. 117
- ㊾ J. Toynbee, *ibid.*, p. 136
- ㊿ Eusebius, V. C. III. 48
- ㋀ H. Kraft, *op. cit.*, S. 117
- ㋁ J. Chrysostomos, *In Acta apostolorum XI. 3*
- ㋂ 彼はこれにキリスト教徒は四〇〇年頃約一二万の人口を有していた。中一〇万人がクリスト教徒、二万人が異教徒、トダヤ教徒であつた。 vgl. E. Stein, *op. cit.*, S. 195-6 Anm.
- ㋃ Socrates, I. 37
- ㋄ Cod. Theod. XIII. 5. 7
- ㋅ この勅令は新首都が特権を享受する新しい動因を示すものであつた。この点からも特筆されねばならぬ。(Dörries, *op. cit.*, S. 201)
- ㋆ ノンマテはその教会史の中で次の如く述べられている。「それ(トローヤの建設)は抄つていたが、神が夜、彼に現れ、他の場所を探す様命じた。それで彼はそれをビザンティウムに変更し

た」(H. E. II, 3)と。又「フィロストルギウスは「皇帝自ら槍をもつて将来城壁が建設されることになる位置に線を引いたが、その余りの広さに一侍従が驚ろき、主人よ、あなたはどこまで遠く行くこうとされるのか」と尋ねたのに対し、皇帝が「私の前に行く者が止るまで」と答えたこと」を告げている。(Philostorgius, H. E. II, 9.) H. Kraft, op. cit., S. 116

①⑦ L. Bréhier, op. cit., pp. 257-8

①⑧ L. Bréhier, *ibid.*, p. 257

①⑨ L. Bréhier, *ibid.*,

A. Piganiol, op. cit., p. 49

①⑩ ヲガニオルは「コンスタンティノポリスがキリスト教的性格から全く程遠いことを指摘している。」

①⑪ ヘルカンのクリスト教化、タルマン民族、ヌラウ民族への伝道は全てコンスタンティノポリス教会の独占的貢献であり、凡ゆる点でローマ教会を凌駕した。(C. Schneider, Die Christen im römischen Weltreich, Historia Mundi Bd. IV, S. 317-8)

①⑫ ソクラテス、ソゾメノスによれば新首都は「ローマと対等になつたことが記されるが (Socrates, H. E. I, 16. Sozomenos, II, 3)、「ユリアヌスは「ローマには劣るが、他のいかなる町よりも、はるかに偉大な町」とし、「ローマとの対等性を一応否定」する。(Julianus, Oratio I, 8)

①⑬ Sozomenos, H. E. II, 3

ソゾメノスの指摘する様にコンスタンティヌスは新首都にデクリオではなくセナートスを設置し、それを富める属州人にとどまらず、更に永遠の町ローマの元老院議員をもつて構成させ、

又ギリシア語を話すその市民を *populus Romanus* と呼び彼らに穀物法を適用させている。クリノストモスによれば、紀元四〇〇年当時、この恩典に浴した者は五万人を数えていた。つまり、それは全人口二万中の四二%に及ぶ高比率を占めており、(Chrysostomos, In Acta apost. XI, E. Stein, op. cit., S. 195-6) 毎日八尺 *modius* の小麦が支給をばらばらした。その供給地はエトリアびやびや (Socrates, H. E. II, 13)

①⑭ Socrates, *ibid.*, II, 41

①⑮ コンスタンティノポリスの元老院が単に *clarii* の称号を持つ第二流の元老院 *senatus secundi ordinis*、びやびやのご対ローマの元老院が通常 *clarissimi* と呼称されたコト (Anonimus Vales, 6, 30)「コンスタンティノポリスの市長官がローマのその如く *praefectus urbi* でびやびや *proconsul* の称号を有したにすぎなかつたコト (Socrates, op. cit., II, 41) もこの間の事情を示すものびやびや。」

①⑯ A. Alfoldi, *Conversion*, p. 113

①⑰ 当時、元老院階級は *ius Italicum* を含む若干の特権のみを享受する社会階層に転じ弱体化していた。しかし彼らの勢力はなおローマ市を代表し、皇帝に対抗し得るほど強力であった。その理由としては (a) 彼らがローマ古代の正統的倫理の保護者と見做されていたこと、(b) 元老院こそ共和国の自由の保護者であるというアウグスト以来の概念が彼らに論理的支柱を提供していたこと、(c) 彼らが古典的教養を有する唯一の知識階級であったこと、及び (d) 大土地所有者として巨万の富を所有していたこと等が挙げられよう。そしてこの元老院階級は熱心な異教擁護

著 467 (A. Alföldi, *A Conflict of Ideas in the Late Roman Empire* (Oxford 1952) pp. 96-7 pp. 106-7; S. Dill, *Roman Society* pp. 149-158)

⑭ 大ニ皇帝ニ中 Olympius, Verus, Severus, Urbicus, Florentius, Eubulus, Studius, Zoticus 等の名前を指摘しう。

(Lécrivain, *Le Sénat romain depuis Diocletien à Rome et à Constantinople* paris 1888. p. 218. I, Bréhier op. cit., p. 251. 467)

⑮ Sozomenos, H. E. II. 3

⑯ J. Burchardt, op. cit., S. 367

彼は「その理由は誰も知らなすが……」としてる。

⑰ Sozomenos, H. E. II. 3

⑱ A. Alföldi, *Conversion* p. 112

五

コンスタンティヌスはアレクサンドロス及びアリウスに宛てた書簡の中で自己の遂行すべき目的は二つあるとして、それを「第一に全ての人々の宗教上の志しを統一すること、第二に激しい痛手に苦しむ全世界の人々を活気づけ、結合させること」①においている。この政治・宗教上の統一ともいうべき二重の目的は、三二四年秋のリキニウスの失墜、三二五年のニカイア宗教会議によるアリウス異端の除去の

後達成された。②三二五年、ニコメディアで挙行された統治二〇周年の祝典はこの二重の目的の完成を記念するものにならなかつた。③元来、記念大祝典がローマを離れて考えられなかつた時、この祝典は正に画期的意義を持つものであつた。しかもニコメディアでの記念祝典が異教礼拝から全く離れてクリスト教的に挙行され、折から宗教会議に参集していた多くの司祭がそれに参列している。④エウセビウスによると「司祭の中、ただ一人も皇帝の招宴に洩れることはなく、その雰囲気は言語に絶して素晴かつた」様である。彼が「人はクリストの王国がかくしてその姿を現し、現実よりも、むしろ夢であると考へた」と⑤結んでゐるのも誇張ではない。

しかしコンスタンティヌスは翌二六年七月ローマへ赴き、再び二〇年祭を祝い、永遠の町に対する尊敬を忘れていない。何故に彼は二〇年祭を再度祝つたのであるか。Soeck はこれをもつて、コンスタンティヌスが自己の単独支配の栄光を東方・西方で誇示せんとした証拠であるとしてゐる。⑥しかし、これは當を得ない。我々はここで勝利と繁栄を象徴する皇帝の記念式典が永遠の町ローマ市で、しかもその

構成員である Senatus と populus Romanus の臨席の下で
 挙行されてきたことに目をとめねばならない。皇帝がロー
 マ市で挙行した二〇年祭の際、Senatus, populus Romanus
 を名譽する貨幣を発行し、更に Senatus と populus
 Romanus が世界権力の象徴である球と王笏を所持するこ
 とをその貨幣の上で容認していることは記念祝典と SPQR
 の結合を暗示するものである。従つて元老院とローマ市民
 を有せぬニコメディアでの記念式典は皇帝の私的な意志の
 表示にすぎなかつた。彼が「クリスト教形式をもつてニコ
 メディアで始めた二〇年祭を公けに祝うためにローマへ赴
 かねばならなかつた」^⑧のはかかる事情によるものであろう。
 しかし前述の如く、ローマでの二〇年祭が宗教行事をめぐ
 り元老院と皇帝との間に対立を招来せしめ、最早、記念
 行事をローマ市で祝うことの不可能なことを知つた瞬間、
 皇帝がそれを公に遂行し得る他の町の建設を計画したこと
 は当然であらう。リキニウスの勝利を記念し、既に建設に
 着手されていたビザンティウムが大規模に拡大發展され、
 同時に政治・社会機構の点でローマを模倣し、第二のローマ
 となる幸運を把んだのは正にこの時であつた。勿論千年の

輝く伝統を持つローマ市に比肩し得る町を、しかも短期間
 で建設することには幾多の困難が伴つたことは十分に予想
 し得よう。しかしビザンティウムは短期間で第二のローマ、
 コンスタンティノポリスとならねばならなかつた。何故な
 ら治世二五年の祝典は目前に迫つていたし、ローマ市とは
 既に最後の決裂していたからである。コンスタンティヌ
 スが新首都建設を属州諸都市を犠牲にしてまで、その早期
 完成を計つたのもかかる事情を物語るものである。ヒエロ
 ニムスの言う様に「殆ど全ての町が裸にされ、コンスタン
 ティノポリスの輝きは高まつた」^⑨のである。当時皇帝が立
 法をもつて「出来るだけ多くの建築家が必要である」と説
 き、十分な給与と一般的義務からの免除等の特権を付与し、
 建築家の養成に努力していることも注意せねばならぬ。ビ
 ザンティウムが数年ならずしも全属州都市を凌駕し SPQR
 を容する帝都コンスタンティノポリスに甦つたのは皇帝の
 かかる努力によるものであつた。

コンスタンティノポリスは治世二五周年に当る三三〇年
 迄に十分な完成を見ず、なお四ヶ年間工事が継続された。^⑩
 しかし一応の体裁を整えた新首都の落成式が二五周年記念

式典をもって祝われたことは極めて印象的である。しかもコンスタンティノポリスは就中キリスト教的都市として建設された帝都であった。コンスタンティヌスがこの理想的中心都市において何はばかることなく、公けに祝典を挙行し得たことは当然であらう。Alföldiがコンスタンティヌスの宗教的發展の最高の時期をコンスタンティノポリスの建設の時に置き、^⑩ Vogt, Jones ^⑪が新首都建設の中に異教的過去との断絶、新しいキリスト教帝国の役割の象徴を見たのは正鵠を得てゐる。

伝統を無視したニコメディアでの記念祝典は皇帝のクリスト教に対する個人的帰依と、国家慣習との間の分離を如実に説明するものであるが、この両者の矛盾なき統合はクリスト教的世界帝国の理想的首都であるコンスタンティノポリスの建設において解決せられたと見做し得るのである。

- ① Eusebius, V. C. II, 64 (B. 16)
- ② H. Kraft, op. cit., S. 114
- ③ Eusebius, V. C. IV, 47
- ④ Eusebius, V. C. I, 1
- A. Alföldi, Conversion, p. 86
- ⑤ Eusebius, *ibid.*, III, 15

- ⑥ O. Seeck, op. cit., Bd. III, S. 425
- ⑦ J. Vogt, op. cit., S. 218
- ⑧ Eusebius, V. C. III, 51
- Sozomenos, H. E. II, 5, Socrates, H. E. I, 16
- A. Toynbee, op. cit., p. 136
- ⑨ Hieronymus, Chron. 2346.
- dedicatur Constantinopolis omnium paene urbium nuttate.
- ⑩ Cod. Theod. XIII, 4, 1
- ⑪ Julianus, Oratio, 1, 8
- ⑫ Alföldi, Conversion, p. 30
- K. Müller の立場も同様である。彼は古くビザンツがクリスト教徒の居住地コンスタンティノポリスに生れかわつた時をもつて、皇帝の宗教的發展の最高の時期と見做してゐる。
- (Konstantin der Große und die christliche Kirche H. Z. Bd. 140. 1929. S. 265-6)
- なおこの点に関しては、近山金次氏も、同様な意見を述べてゐる。(ミラノ勅令前後、史学三十一卷一—四号四三八頁)
- ⑬ J. Vogt, op. cit., S. 219, 265
- ⑭ A. Jones, op. cit., p. 236

結 語

コンスタンティノポリスの建設は、疑いなく政治・宗教

面に現われた一連のコンスタンティヌスによる改革の頂点をなすものであり、それは「皇帝の最も強固なローマ的性格の否定」^①を意味するものであった。彼はユリアヌスの言う様にまさに *novator* であった。ローマ市に代表される古い理念は彼に依り大幅に修正され、或いは放棄された。

勿論例外もあつた。コンスタンティノポリスに現われたローマ的諸制度の採用、若干の異教寺院の温存はその好例であり、我々はその中にローマ市に対する彼の深い畏敬の念をすら見出し得るのである。^②しかしこの事実をもって彼の宗教的曖昧性を論ずべきではない。彼とても、矢張り全てのの人々と同様、ローマ市の永遠を信じ、その衰退など全く念頭におき得なかつた古代人であつたことを忘れてはならない。我々は四分の三世紀後の四一〇年、ローマ市がアラリックの率いるゴート軍の脚下に踏みじられた時の教父ヒエロニムスの言葉を想起したい。「全世界の真に最も明るい光が消えざり、ローマ帝国の首が打落され、より正し

くいうならばこの一都市において全世界が没落し去つた今では、私は黙して卑められた」とした彼の言葉は、当時、ローマ市が依然として凡ゆる畏敬の対象であつたことを如実に物語るものに他ならない。

この事実を考慮し、更に積極的に、前述の対ローマ市の長い歴史、皇帝のクリスト教的諸政策、そして新首都の景観に目を向ける時、コンスタンティノポリスがクリスト教的世界首都として、異教都市ローマに対抗して建設されたことは無理なく承認し得るであらう。新首都建設問題を扱うに当つては、政治的・軍事的・地理的諸事情と並んで宗教的考察を無視し得ぬ所以である。

① J. Burchardt, op. cit., S. 360

② C. Schneider, op. cit., Bd. II, S. 322

③ Hieronymus, In Ezechielem I. Postquam vero clarissimum terrarum omnium lumen extinctum est, immo Romani imperii truncatum caput: et ut verius dicam, in una Urbe totus orbis interit, obmutui et humiliatus sum.

villages also might be completed as a premise of executing the revised law. This system was established in the following three periods, (1) *Tensho* 9~*Keicho* 9 (天正9—慶長9), (from the period of governing *Go*(郷) or *Kumi* (組) by grasping *Fuchi-Hyakushō* (扶持百姓) to the establishment of *Tomurakimoiri* (十村肝煎) and *Tomurakumi* (十村組), (2) *Keicho* 9~*Genna* 6, (慶長9~元和6), the arrangement of the early *Fuchihyakusho* and differentiation of *Tomura* (十村) and *Murakimoiri* (村肝煎), (3) *Kan'ei*~*Keian-Meireki* (寛永~慶安・明曆), (the preparing period for the revised law, and the complete organization and strengthening of *Tomura* (十村) system). In this article about thirty five years are to be discussed from *Toshiie Maeda's* (前田利家) entering into *Noto* (能登) to *Genna-Embu* (元和~偃武), the first and second period in the above-mentioned division. In the warring period from *Toshinaga* (利長) the Second to *Toshitsune* (利常) the Third the question is in the way how the subject people take serious, actual, and sometimes urgent require of the lord. Therefore we will study the duty of the chief villagefarmers who were given ration, and the relation of *Kyunin* (給人) or *Daikan* (代官) who were made for doing its duty against general peasantry; so, the process of integrating into the *Tomura, Murakimoiri* (十村・村肝煎) system the small farmers who were going to be independent, on the basis of the developing reality in the villages.

The Constructin of Constantinopolis and its Importance

by

Ichirō Nitta

The construction of a new capital by Constantinus, along with the authorization of Christianity by him, must be marked as the most important event that changed the later Roman Empire and the European world.

There is no established theory, however, about the reason why the construction of the new capital was to be planned; one is on the stand of studying it under the military, geographical, and political circumstances, the other insisted the necessity of studying the religious aspect, grasping its construction in the serious relation of the city of Rome.

When one turns his eyes to the international circumstances of the Empire in the fourth century, he must accept the former stand. When we think over the fact that Nicomedia, Tesaronica, and Sirumium in that time became the capital in turn for their political, military, and geographical importance, but could not become 'Eternal City' or 'the Second Rome', we feel keenly the necessity of the further religious investigation.

Then, taking on the second stand, first of all we are going to study the problem within the Roman history, and come to the construction of the new capital as a christian world city against the pagan city of Rome.

Trend of the Early Capitalism in the Period of
Genroku-Kyoho (元禄・享保) —Case
of *Genzô Shôno* in *Hino* (日野) of *Omi* (近江) —
by
Yoshio Nishikawa

We have many studies on the circulating process in the *Edo* era. This article will clear up the trend of the early capitalism through analysing the management of *G. Shôno* (正野玄三), an *Ômi* (近江) merchant. The *Shônos* (正野家), who were an originator of the *Hino* (日野) nostrum, and so on, were one of the most wealthy merchants here, their foundation being constructed by *Genzô* (玄三) the First. He was a typical *Ômi* (近江) merchant then in growth who was operating among the formation of national market about half a century from *Jyôkyo* (貞享) to *Kyôho* (享保) or so-called 'the *Genroku* (元禄) era'. His commercial operation, began with carrying popular articles down to *Shin'etsu* (信越) or *Kantô* (関東), later grew the putting-out capital into *Kyôto* (京都) or *Ôsaka* (大坂), confining his operation within rape-seeds and imported high-class textiles. That is, in the earlier period he grew up by the development of the commodity economy for peasantry on the basis of the eastern-lake district in *Ômi* (近江), and interested in the circulation of commodities among the three cities (*Edo*, *Kyoto*, and *Ôsaka*) or small markets, after his frequent restlessness he became a carrier of the far-off circulating organization since the *Hôei* (宝永) period, through the process of which we intend to examine the trend of the early capital in *Genroku-Kyoho* (元保・享保) period.